vol.83

宇輝人

1 本番の時に着る当時の普段着、絣の着物　**2・3** 週に一回の練習 真剣な中でも楽しさを忘れない　**4** ふるさと祭りでの赤白餅投げ　**5** 豊年餅つき踊りの餅をつく場面は大盛り上がり（前列㊧河野会長、㊨日隈波枝さん）

豊年餅つき踊りの動画はこちら

我ら松橋町豊川豊年餅つき踊り保存会

三味線の音とともに元気な掛け声が南豊崎公民館に響く。松橋町豊川豊年餅つき踊り保存会のメンバーが出す「おざや節」の音だ。

平成2年に創立した保存会。現在は18人のメンバーで毎週火曜日に練習を行う。練習中は笑いが絶えず、いつもにぎやか。中には数十年踊るベテランもいる。

豊年餅つき踊りは、日露戦争の戦地で、食料も無くいつ死ぬかも分からない状況の中、豊川出身の藤本猪之八が考案した。苦しい状況でも、人々を楽しませようとした人情味あふれる猪之八。ふるさとの豊川を思い出し、戦友と餅つきのつき手と、餅をひっくり返すこどり役を仕立てて正月の餅つきを表す踊りを創作した。

舞台では、出し物の説明をする「口上」をはじめ、三味線や太鼓、唄と合いの手をするお囃子の「地方」、「踊り手」が登場。当時の干拓作業の様子を唄った民謡「おざや節」や餅つきの準備「計り米」、「豊年餅つき踊り」の3部構成だ。間には熊本弁丸出しの芝居「にわか」も入る。

豊年餅つき踊りの魅力は、その軽快なリズムと踊り手のユーモラスな表情や動き。踊る人も見ている人も思わず笑顔に、元気になる。60年近くのベテラン、会長の河野章子さんは「これまで結婚式やテレビ局、熊本城400年祭のイベントなどたくさんの場所で踊ってきました。地元の子どもやいろいろな年齢層の人たちとつながれることはうれしいし、やりがいです。」と笑顔で語る。

伝統の踊りを伝えたい

20年以上この郷土芸能を伝承する活動を行う保存会。地元の豊川小の6年生に教えるのは毎年の恒例行事だ。覚えた踊りは実際に児童が学習発表会「豊川小まつり」で披露する。最近では、メンバー不足の状況を知り、発表会後も練習に参加するようになった子どもたちもいる。その一人、上田悠依奈さんは「教えてもらった踊りを次は私たちが誰かに教えることができたらと思って練習に参加しています。工夫した動作やみんなでそろえる踊りができたときは楽しい。今年から中学生になりますが、今後も続けていきたいです。」とうれしそうに話す。

練習に子どもたちが入ったことで保存会も活気づいた。「若い人が練習に来てくれるとこちらもうれしい。」「貴重な交流の場だと思って毎週練習に行くのが楽しみ。」とメンバーたちの声も明るい。

「子どもたちには食べ物が当たり前に手に入る今の時代、豊作を願っていた時代があったことを踊りを通して学んでほしい。今後もこの踊りが絶えずずっと続いて、藤本猪之八さんの思いをつないでいってほしいです。」と河野さん。事務局を務める中村亜紀さんは「伝統芸能であるこの踊りは、仮に無くなったとしても生活に困るわけではない。放っておくと簡単に消滅してしまいます。だからこそ受け渡す側が強い意志を持って伝えていかなくてはなりません。」と真剣な思いだ。

豊川地区の財産である豊年餅つき踊り。その強い思いをつなぎ、保存会はこれからも伝統を絶やすことなく引き継いでいく。

松橋町豊川豊年餅つき踊り保存会

matsubasemachi-toyokawa-honen mochitsukiodori-hozonkai

平成2年創立。豊川地区の郷土芸能である豊年餅つき踊りを知ってもらおうと活動する団体。伝承のため、毎年子どもたちに踊りの指導や、ふるさと祭りなどの地域の行事で踊りを披露している。

地元の伝統を次の世代につなぐ――。

中村亜紀さん